

アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞

奥 田 統 己

目次 はじめに

1. 資料および分析方法
 2. 副助詞についての先行研究
 3. 副助詞の統語論上の特徴
 4. 個々の副助詞の記述
 5. 終助詞についての先行研究
 6. 終助詞の統語論上の特徴
 7. 個々の終助詞の記述
- 参考文献

キーワード：アイヌ語、副助詞、終助詞、モダリティー、焦点

はじめに

本誌1号(1995)に掲載した拙稿「アイヌ語静内方言の接続助詞」に引続き、本稿ではアイヌ語静内方言の副助詞と終助詞の意味・機能について考察する。

同じ方言についてはすでにREFSING(1986)が副助詞・終助詞を含めた総合的な記述を行っており、本稿はその記述に対して修正・補足を試みたものである。また他の方言を含めたアイヌ語の副助詞と終助詞については知里真志保(北海道・樺太全般)田村すず子(主に沙流方言)浅井亨(石狩方言)らによる分析が示されている。

以下では副助詞と終助詞のそれぞれについて、まず統語論的特徴に関する先行研究を概観し、ついで筆者による統語論的特徴の分析を示し、そのうえで個々の語について、先行する分析を随時参照しながら、記述する。

モニターとして本稿を読み、貴重なご意見をくださった先生がたにこの場を借りてお礼を申し上げます。

1. 資料および分析方法

拙稿(1995)と同様、本稿が資料とするのは北海道日高地方中部の静内町に在住した織田ステノさんが語った口頭文芸を中心とする延べ約11万語のテキストである。これらのテキストはいずれも、静内町教育委員会があるいは同委員会の委託を受けた筆者が採録したもので、筆者が録音からの文字化を行った。その大半は静内町教育委員会(編)(1991-1995)として対訳のうえ公刊されている。

本稿にまとめた分析を筆者が本格的に始めたのは話者が死亡したあとである。そのため本稿での記述は基本的にテキスト中の用例から導かれる支配的な用法の指摘にとどまっている。そこで記述の信頼性についての情報を補うためそれぞれに用例の概数を付記した。

本稿の資料は英雄叙事詩などの口頭文芸を中心としており、会話的な資料をほとんど含んでいない。したがって本稿の、とくに終助詞についての分析は、日常会話での用法というよりは口頭文芸に特徴的な用法を反映したものである。なおREFSING(1986, p.65)によれば、同書の記述は口語資料と口頭文芸との双方に基づいているとされる。

また拙稿(1995)で述べたとおり、織田さんのアイヌ語は、現在得られる資料から推測される静内川上流の他の話者の方言に比べて、いくつかの点でより北海道東北部的な特徴を持っている。そのため静内地方全体のアイヌ語を把握するためには、織田さんの言葉とその他の話者の言葉とを突き合せて行く作業が今後必要である。

2. 副助詞についての先行研究

2.1. 本稿が副助詞として扱う一群の助詞について、その品詞分類の基準を含めてはじめて整理したのは知里(1942, pp.582ff.)である。そこでは本稿での副助詞にあたるものとして「第五種」「第六種」「第七種」の3つの分類を立て、それぞれの統語論上の特徴を以下のようにまとめている。

第五種の助詞(副助詞)

(イ) 名詞に付く。(ロ)「名詞+第四種の助詞(奥田注:格助詞など)」から成る連語に付く。(ハ)副詞に付く。(ニ) 独立的(副詞的)用法を有するものもある。

第六種の助詞(係助詞)

この種の助詞は(イ)名詞に付く。(ロ)「名詞+第四種の助詞」から成る連語に付く。(ハ)「名詞+第五種の助詞」から成る連語に付く。(ニ)副詞に付く。(ホ)「用詞(奥田注:動詞)+第三種の助詞(奥田注:接続助詞)」から成る連語にも付く。(ヘ)そこで終止することなく常に下へ続いて行く。(ト)語勢を添へるだけで、それ自身に具体的な意味を有しないので、独立的(副詞的)に用ひられることは無い。

第七種の助詞（間投助詞）

極めて種々のものに付いて感動的な意を添へる。その点第六種の助詞に酷似してゐるが、第六種の助詞は常に下へ続いて行くのに対して、第七種の助詞はそこで文を終止することもある。(中略)独立的(副詞的)に用ひられることは無い。

知里(1953, pp.924-927)も基本的には同様の記述を行い、知里(1942)の第五種を「第7種」、第六種を「第8種」、第七種を「第9種」としている。

田村(1960:70)はアイヌ語の助詞全体の働きをまとめたなかで

副助詞とは

動詞的形式A + □ + (修飾語+) 助動詞的に使われた動詞 = 動詞的形式B

名詞的形式A + □ = 名詞的形式B

副詞的形式A + □ = 副詞的形式B

の3種類の□の位置にはいることのできるもの

だとしている。田村(1961:21)も同様に規定しているが、その補注のなかで「動詞的形式+副助詞」は、そのあとに「助動詞的に使われた動詞」を伴ってはじめて、全体が動詞的形式になる。その場合、前者は後者の目的語のような関係になっており、その意味で、名詞的であるとも云える」(36)と指摘している。

REFSING(1986, p.171)はrestrictive postposition(「限定後置詞」)という品詞を立て、次のように述べている。

Restrictive postpositions may in principle follow all types of adjuncts, but semantic conditions impose limits upon their distribution.

仮訳：限定後置詞は原則としてすべての種類のアジャンクトに後続しうる。しかし意味的な条件がその分布に制限を加える。

同書の統語論に関する記述(p.268)によれば、ここでのアジャンクトとは、文中で述語動詞に対して何らかの格関係を担っている名詞句(+格助詞)、文中で副詞として働いている形式、文または名詞句に引用詞が後続した形式、の3種である。ただし具体的には前2者だけに限定後置詞が後続するように記述されている。

またREFSING(1986, p.162)はcoordinative postposition(「並列後置詞」)という項を立てている。そのなかでは限定後置詞のka, he, heneが並列の働きを持つとし、またusaも並列の働きを持つとしている。

浅井(1969, p.791)は副助詞について

名詞および動詞的形式のほか、いろいろの形式につく助詞のうち、通常、文末に来ないもの。

ある語の後につき、何らかの意味を添えるが、一般的には、その語の文中での職能を変えないような形式といえる。

ただし動詞についた場合には、全体が名詞的な職能を持つといえるようであると述べている。

2.2. 知里(1953, p.930)は「助詞が直接立場(或は文脈)に付属して単独で文節を構成する場

合の用法を、独立的用法と名づけよう。」としたうえで「第7種もたいていこの用法をもつ。第8種にもこの用法を持つものがあるけれどもむしろ稀のようである。第9種の助詞にはこの用法が全然ないようである。」と述べている。

田村(1961:25)は個々の副助詞の記述を行うなかでpatekという語をとりあげ、「いわゆる“独立的用法”があるので、これは「助詞」ではなく「副詞」のなかにはいるが、多くの点で前後の統合のしかたが副助詞と同じであるので、便宜上ここで記述しておく。「副助詞」に近い「副詞」と云える。」としている。REFSING(1986, p.135)もAdverbs of Quantity and Distribution(「量・分布の副詞」)という項目で例を示さずにpatekを取り上げ、“Patek is also found as a restrictive postposition”(「patekは限定後置詞としてもみいだされる」)と注記している(p.281)。

2.3. 知里(1942)はここで扱う副助詞を承接の違いに着目して上掲の3種に下位分類した。いっぽう田村(1961:27)は副助詞の明示的な下位分類を行わず、知里(1942)が係助詞としてあげた語のうちのいくつかについては

結びに特定の助詞(中略)が使われることがあるので、知里真志保博士は「係助詞」と呼んでおられる(中略)。しかしこの方言では、その結びの助詞は必ずしもあるとは限らない。いずれも特にはっきりした意義素はなく、前にある形式の“意味を強める”程度のものである。必要の場合には「つよめの(副助詞)」と呼ぶことにする。

と述べている。また知里(1942)が間投助詞としたもののうちunは終助詞に分類し、heについては「文を終止することもあるので、終助詞との中間的存在だと云える」としている。

REFSING(1986, pp.171-177)は限定後置詞のセクションに、もっぱら意味上の区別に基づいた次の3つの下位セクションを設定している。

- Topic, Contrast, and Emphasis (「主題、対照、強調」)
- The Postposition of Inclusion (「包括の後置詞」)
- Other Restrictive Postpositions (「その他の限定後置詞」)

3. 副助詞の統語論的特徴

3.1. 本稿では副助詞を、名詞句、副詞句および動詞の目的語として働いている動詞句に後続し、その統語論的働きを変えずに意味を付け加える付属語として定義する。これは実質的には上に述べた田村(1960)の定義と同じである。

3.2. 副詞のうちeasir「まさしく」、keray/keraypo「たったそれだけ、そればかり」の3つは、他の副詞と同じように独立して用いられるだけでなく、名詞句や副詞句に後続してその統語論的働きを変えずに意味を付け加えるという働きをも持つ。次の例文(1)(2)は独立して用いられた例、(3)(4)は名詞句や副詞句に後続した例である。

- (1) *easir* aynu utar kewtumu pirka siri an=erayap
まさしく 人間 たち 心懸け よい ようす 私が~に感心する
「まさしく人間たちの心懸けのよいようすに私が感心した」
- (2) *keray* ku=kor citarpe ne wa, nispa ku=koyayattasa hawe ne na
それだけ 私が~を持つ 花ござ である して 紳士 私が~に返礼する ようす ~である ぞ
「これだけ私が持っている花ござでして、旦那さんに私はお礼をするのですよ。」
- (3) i=koraci, rametok kor pe *easir* hoku ne a=kor rusuy
私のように 勇気 ~を持つ もの こそまさしく 夫 として 私が~を持つ したい
「私のように勇敢な人をこそまさしく、夫に私は迎えたい」
- (4) *sapo* tura *keraypo* oka=an
姉さん とともに ばかり 私がいる
「姉さんとばかり私は暮らしていた」

このように、独立して副詞的にもまた他の形式に後続して助詞的にも、用いられる語がアイヌ語には数多くみられる。そうした語を知里(1953, pp.928-932)は「独立的用法をもつ」助詞とした。また浅井(1969, pp.786-787)も助詞のなかには「自立語とも認められることのあるような形式」があると述べている。

これらに対して田村(1960:69)は「“ 独立的用法”を持たないものだけしか助詞と呼ばない。」とし、田村(1988, pp.37-39)はそうした語のうち主として格関係を表すものを「後置副詞」の項で記述している。なお「後置副詞」という用語は拙稿(1995)でも用いた。また田村(1961:25-26)はとくに、静内方言の*keray*などと類似した用法を持つ*patek*について「いわゆる“ 独立的用法”があるので、これは「助詞」ではなく「副詞」のなかにはいる」と述べている。

本稿では*easir*と*keray*とを「副助詞的に働く後置副詞」とし、以下の分析から切り離れたうえこの項で言及しておく。静内方言の後置副詞全体については稿を改めて論じる予定である。なおREFSING(1986, p.177)は*keray*を限定後置詞の一つとして示している。またREFSING(1986, p.176)が限定後置詞に含めた*pakno*も本稿では後置副詞だと考え、同じく*ranke*は接続助詞だとしたうえで拙稿(1995)で記述した。

3.3. 本稿では副助詞を以下の2つに下位分類する。

3.3.1. 直前の形式を取り立てる働きだけを持つもの

この方言には*anak/anakne*, *ka*, *kane*, *neyakka*, *hene*, *patek*, *poka*, *usa*の9つがみいだされる。

これらは文全体のモダリティーに関わりなく、以下の例文のように平叙文(5)・疑問文(6)・命令文(7)いずれのなかでも用いられる。

- (5) menoko *anak* menoko sompay an=ecakoko
女 は 女 仕事 私たちが～に～を教える
「女には女の仕事を私たちが教えた」
- (6) utarpa *anak* taa koraci oka ruwe
指導者 は この ように ある のか
「指導者とはこのようにあるものなのか」
- (7) an=ukosukupka utar *anak* emkota utura oka yan
(受身) ～を許嫁にする 人たちは 早く 一緒に いる なさい
「許嫁にされた人たちは早く一緒に暮らさない」

また名詞化されて埋め込まれた文の内部で用いられたり(8)、名詞+所属形というかたちの所有表現のあいだに挿入されたりする(9)など、文中のさまざまな要素に後続しうる。

- (8) eani *anakne* tumpu or ta an=e-resu wa e=an ruwe an=nukar
お前 は 寝台 で (受身) お前を育てる して お前がいる ようす 私が～を見る
「お前が寝台で育てられているようすを私は見た」
- (9) a=kor tutto *anak* reraruhu an=mesu
私が～を持つ 母 は ～の乳房 (受身) ～を矧ぐ
「私の母の乳房が矧がされた」

3.3.2. 文全体のモダリティーと呼応し、その焦点を指示するもの

この方言にはesta, enta, he, hetap, omoun, ta, tap/tapta/taptapの9つが存在する。

この下位分類は知里(1942)のいう係助詞、田村(1961:27)による「つよめの(副)助詞」に相当する。それぞれ、平叙、yes/no疑問、選択の疑問、疑念、推量の疑問、疑問詞の疑問、平叙のいずれかのモダリティーを持つ文中でしか用いられない。この点で、「特定の助詞」(田村、1961:27)で結ばれるとは限らないものの、文末にかかっていると考えることができる。

また前項で取り上げたものと異なり、これらの用例の多くは、次の2つに限られている。ひとつは主文の主語・目的語にあたる名詞句に後続するかまたは主文の述語動詞にかかる副詞句に後続して、それらを文全体のモダリティーの焦点として指示する場合である(10)。今ひとつは、REFSING(1986)がsentence final forms(「文末形式」)と呼んだ表現のなかに現れ、文全体のモダリティーを強調する場合である(11)。ただし6.2.4.で取り上げる疑念を表すhetapは、埋め込み文のなかでもしばしば用いられ、この節で説明しているグループと前節で説明したグループとの中間的な存在だといえることができる。

REFSING(1986)はこれらのうちheだけを限定後置詞として取り上げ、またesta, enta, ta, tapは文末形式の構成要素としてのみ示している。しかし本稿の資料中には例文(10)のようにestaな

どが副助詞として用いられている例が少ない。

- (10) taanta *esta* an=i=nuyna
ここにこそ (受身)私を隠す
「ここにこそ私は隠されていた」
- (11) toyraywenray=an ruwe *esta* an ne
私がひどい死に方をする ようす こそ ある ぞ
「私はひどい死に方をしたようすでこそあるぞ」

4. 個々の副助詞の記述

4.1. 直前の形式を取り立てる働きだけを持つもの

4.1.1. anak, anakne 「～は」

直前の形式を話題として示す。anakの用例は本稿の資料中に250以上、anakneも80例ほどあり、両者の違いはみいだせない。

REFSING (1986, p.171) はanakとanakneを”Topic, Contrast, and Emphasis” (「話題、対照、強調」) の限定後置詞としている。

- (12) amampo kikir *anakne* haru se kamuy ne ruwe ne na
キリギリスは は 食料 ～を携行する 神 ～である ようす ～である ぞ
「キリギリスは食料を運んでくる神なのだぞ」

4.1.2. hene 「～も」

複数あるものを列挙するとき、それぞれに後続したり、そのなかから例示されるものに後続したりする。用例は120以上あり、この方言での付属語の傾向に従い、ほとんどの場合語頭のhが弱化・脱落する。

REFSING (1986, p.175) は”at least” (最低限)であることを示すとしているが、示されている用例の解釈は再検討を要する。田村 (1961: 23) は「一例として提示する。決定は他にまかせる」としている。

- (13) kamuy *hene* yuk *hene* poronno an=se ki
熊 も 鹿 も たくさん 私が～を携行する する (語調を整える補助動詞)
「熊も鹿もたくさん私は運んできた」

4.1.3. ka「～も」

ア. 直前の形式を他のものに追加して示す(14)。イ. 疑問詞に直接後続して不定疑問の意味を明示する(15)。ウ. 否定文のなかで、否定の焦点を示す(16)。用例はあわせて200ほどである。

REFSING (1986, pp.173-175) はア. イ. の用法をinclusive (「包括」) の働きのなかに含め、疑問詞にkaが後続した形式を一語として不定疑問詞だとしている。しかしkaが後続しなくても疑問詞は不定の意味で用いられるので、kaは不定疑問詞を形成する接尾辞ではない。田村 (1961: 23) は「予期されない意外なことだということを表す」とし、田村 (1996, p.267) は「予想以上、追加、意外を表す。」としている。

- (14) hat punkar ari puyar ka a=toykosinasina
ブドウ つる ～を用いて 窓 も 私が～をしっかり縛る
「ブドウづるで窓も私はしっかり縛った」
(悪者が家から出られないよう、この前に戸口を縛る描写がある)

- (15) enon ka kira=an
どこへ も 私たちが逃げる
「どこへか逃げましょう」

- (16) anani anak wenkamuy ka somo an=ne
私 は 悪い神 も 否定 私が～である
「私は悪い神ではない」

4.1.4. kane「こそ」

主に副詞句に後続してその意味を強調する。用例は300以上みられるが、そのうち200以上はarinoという引用詞に後続した例で(17)、60ほどはtapne「このように」という副詞に後続した例である。その他の副詞句に後続した例を(18)に示す。

REFSING (1986) はkaneという語形の助詞を接続助詞としてのみ記述している (p.250)。しかし接続助詞のkaneと副助詞のkaneとは意味が大きく異なるため、本稿では同音異義の別語として分析した。なお沙流方言の助詞kaneについて田村 (1996, p.273) は「意外、予想以上、誇張の表現に多く使われる。」としたうえで助動詞、接続助詞、副助詞の3つの品詞分類を示している。そのうち副助詞としての記述は本稿での分析に近く、接続助詞としての記述も拙稿 (1995: 147) の分析と重なる。しかし助動詞としての用法は本稿の資料中にみいだされない。

- (17) "yupo ye p an=nu" arino kane hawki=an
兄さん ～を言う もの 私が聞くとこそ 私が話す
「『兄さんの言うことを聞こう』と私は話した」

- (18) an=resu kamuy emkota *kane* hotanu apkas
 私が～を育てる 神 早くこそ 訪問 歩く
 「私が育てた神よ、早く（許嫁を）訪問に行きなさい」

4.1.5. neyakka 「～でも」

ア. ある基準から譲歩したものとして直前の形式を示す(19)。イ. 6.1.2.のheneと同じく、列挙したり例示したりする働きもある(20)。用例はあわせて380ほどである。

REFSING (1986, p.105) は不定疑問表現の一部としてのみ言及している。

なお語源的にはおそらくコンピュータのneと接続助詞のyakkaとから成り立っていると考えられる。しかしコンピュータが主語に呼応して人称接辞をとるのに対し、副助詞のneyakkaには人称接辞が接頭しない(21)。また名詞句+格助詞といったコンピュータが後続しえない形式にもneyakkaは後続できる。こうしたことから本稿ではneyakkaを固まった一語の副助詞と認定した。

- (19) taanta anakne taa a=utari patek *neyakka* a=e p ka hayta na
 ここでは こう私の仲間 だけ でも 私達が～を食べるものも 足りないぞ
 「ここではこうして私の仲間だけでも食べるものが足りないのだぞ」

- (20) iyoype *neyakka* ikor *neyakka* opitta an=e=easinke
 宝器 でも 宝物 でも 全部 私があなたに～を賠償として渡す
 「宝器でも宝物でもすべて私はあなたに差し出します」

- (21) anani *neyakka* nep ka wen sampe a=kor pokon
 私(4人称単数人称代名詞) でも 何か 悪い心 私が～を持つ みたいに
 「私も何か悪い心がけを持っているみたいに(親が振る舞う)」

4.1.6. patek 「～ばかり、～だけ」

直前の形式以外にはないことを示す。用例は約90みられる。REFSING (1986, p.177) の記述は本稿と矛盾しない。また沙流方言について田村(1961:25-26)が記述したいわゆる独立的用法はこの方言のpatekにはみられない。

- (22) e=cis kane *patek* e=an
 あなたが泣く ～ながら ～ばかり あなたがいる
 「あなたは泣いてばかりいる」

4.1.7. poka 「～だけでも」

直前の形式が最低限であることを表す。用例は約70みられる。

REFSING (1986) には記述がない。田村(1961:24)は「程度の最低限界を示す」としている。

- (23) a=utari utar iperusuy kus sine not *poka* i=kocari yan
私の仲間 たち 空腹だ ので — あご だけでも 私に~をばらまく 丁寧
「私の仲間たちが空腹なので一口でも(肉を)恵んで下さい」

4.1.8. *usa* 「~も」

*ka*の \bar{a} と同様、直前の形式を他のものに追加して示す。用例は15ほどである。

REFSING (1986, p.164) が並列後置詞の項であげているような用例は、本稿の資料中では副詞として分析することができ、意味も「さまざまあるうちの一部である」ことを表すもので、ここで述べている副助詞の*usa*とは異なっている。知里(1942)田村(1961)には副助詞としての*usa*の用法は報告されていないが、田村(1996, p.785)は副詞の*usa*とは別な見出し語として「…も」という意味の副助詞*usa*を示している。

- (24) eani *usa* poronno ipe
お前 も たくさん 食事する
「お前もたくさん食事しなさい」(先に食べている人のせりふ)

4.1.9. *newa* 「~と」

2つの名詞句のあいだに置かれ、それらが並列の関係にあることを明示する。この方言では名詞句を並列するとき、ふつうはとくに助詞を必要としないので、*newa*自体が並列関係を産み出していると分析する必要はない。

REFSING (1986) には記述がない。知里(1942, p.583)は「…と」という意味の副助詞として記述しているが、田村(1961, 1996)によれば沙流方言にはみられない助詞のようである。

- (25) i=kosukup mat *newa* a=kor turesi iuta wa *usa* sito kar
私の許嫁 ~と 私が~を持つ 妹 穀物を搗く して いろいろと 団子 ~を作る
「私の許嫁と私の妹とは穀物を搗いていろいろと団子を作った」

4.2. 文全体のモダリティーと呼応し、その焦点を指示するもの

4.2.1. *esta* 「~こそ」

平叙文中に用いられ、強調したい焦点を示したり(10)、文全体を強調したりする(11)。例文はすでに3.3.2.に示したものを参照されたい。用例は16ほどみられる。

REFSING (1986) には独立した記述はなく、知里(1942)田村(1961, 1996)の扱った方言にもみられないようである。

4.2.2. *enta* 「~か」

いわゆるyes/no疑問文中に用いられ、当否を確かめたい焦点を示したり(26)、文全体の当ある

いは否についての疑問であることを明示したり(27)(28)する。用例数は190ほどである。estaと同じくREFSING (1986)には独立して記述されておらず、知里(1942)田村(1961, 1996)も報告していない。

- (26) an=resu kamuy e=kisarkor wa *enta* e=an ya
 私が育てた 神 あなたが耳を持つ して か あなたがいる か
 「私が育てた神よ、あなたは聞こえているのですか」
- (27) kim ta kuca kor utar apunno oka ruwe *enta* an a
 山手 狩小屋 狩小屋 ~を持つ 人たち 平穩に いる ようす か ある した
 「いったい、山で狩小屋に泊まっている人たちは無事でいるのか」
- (28) eci=i=kosunke hawe henne *enta* an a
 お前たちが私に嘘をつく ようす 否定 か ある した
 「お前たちは私に嘘をついているのではないか」

4.2.3. he 「～か」

複数の可能性が考えられるyes/no疑問文中に用いられ、選択の当否を確かめたい焦点を示したり(29)、文全体が選択したことがらの当否についての疑問であることを明示したり(30)する。用例は20ほど存在する。これに対し4.2.2.に記述した*enta*は一つの可能性についてのyes/noを問題にする文で用いられる。例文(28)のように否定の副詞に続く例は*enta*にのみみられる。

REFSING (1986, p.176) は“marks an adjunct as doubtful” (「アジャンクトを疑わしいものとして示す」)と述べている。田村(1961:24)は「その事柄が疑問の対象であることを表わす」としている。

- (29) aynu *he* an, wenkamuy *he* an
 人間 か ある 悪い神 か ある
 「人間なのか、悪い神なのか」
- (30) poknamosir a=kokiru hine arki=an ruwe pirka ruwe *he* an
 地獄 私が~を~に向かわせる して 私が来る ようす 良い ようす か ある
 良い ようす か ある
 「(悪者を)私が地獄に突き落としてきたのは、良かったのか(悪かったのか)」

4.2.4. hetap 「～だか」

疑念を表す文中で、疑念の焦点を示したり(31)、文全体への疑念であることを明示したり(32)する。用例は50ほどである。ただし3.3.2.で述べたとおり従属節のなかでもしばしば用いられる(33)点だが、4.2.で記述する他の副助詞とは異なっている。

REFSING (1986) には記述がない。田村 (1961:27) は前項に述べた *he* と「つよめの (副助詞)」の *tap* の連続を例文中に示している。

- (31) *sine pa hetap ne okkaypo utar tura oka=an*
1 年 だが その 男の子 たち と一緒に 私がいる
「1年だか、その男の子たちといっしょに私は暮らした」
- (32) *kamuy ne manu p an=ye yakka*
神 ~である という もの 私が~を言う しても
kamuy utar inkar ruwe hetap oka
神 たち 見る ようす か ある
「神であるというものを私が呼んでも、神々はご覧になっているのだか」
- (33) *tutko hetap rerko hetap oka=an konno cise soy ta aynu apkas apkas*
2 日 だか 3 日 だか 私がいる すると 家 外 に 人間 歩く 歩く
「2日だか3日だか暮らしていると、家の外で人が行ったり来たり歩き回った」

4.2.5. *omoun* 「~だろうか」

あることがらを推量してその当否を問う疑問文中で、推量・疑問の焦点を示したり(34)、文全体が推量していることへの疑問であることを明示したり(35)する。用例は20弱である。

REFSING (1986) には記述がなく、知里 (1942) 田村 (1961, 1996) の扱った方言でも報告されていない。

- (34) *easir kamuy i=apkaste wa omoun taa koraci*
まさしく 神 私を歩かせる して だろうか こう ように
pirka kewtumu pirka nispa or ta arki=an wa an=i=eham hawe
よい ~の心懸け よい 紳士 ところに 私が来る して (受身) 私を泊める ようす
「まさしく神が私を歩かせてだろうか、このように
立派な、心懸けのよい紳士のところに私は来て泊められているのか」
- (35) *iokunnuka a=kor yupo a=koapeare siri omoun an*
かわいそうに 私が~を持つ 兄さん (受身) ~に火を焚く ようす だろうか ある
「かわいそうに、兄さんは火責めにあわされているのだろうか」

4.2.6. *ta* 「~か」

ア. 疑問詞による疑問文のなかで用いられて、疑問の焦点を示したり(36)、文全体の疑問であることを明示したり(37)する。イ. 疑問詞に直接後続して、4.1.3.の *ka* のイ. と同じく、不定疑

問の意味を明示する(38)。用例はあわせて250ほどである。

REFSING (1986)には独立した記述はない。知里(1942, p.585)は「語勢を添へる。多く願望の係となる。」と述べ、また田村(1961:27)も「つよめの(副)助詞」としてtaを示している。これらが扱った方言では疑問文中で本稿の記述のように働くtaは報告されておらず、いっぽうここで記述しているtaには知里(1942)田村(1961)の示したような用法はない。

- (36) onon arki p ta onnotayne irara hawe ene oka hi an
 どこから 来る もの か 生意気に 悪さする ようす こう ある こと ある
 「どこから来たものがか、生意気にも悪さをするか」
- (37) nep kus e=apkas siri ta an
 何 のために あなたが歩く ようす か ある
 「何のためにあなたは歩いてきたのですか」
- (38) a=kor yupo ka onon ta kamuy menoko ek hine eutanne
 私が~を持つ 兄さん も どこから か 神 女 来る して ~と家族・仲間になる
 「私の兄さんも、どこからか神のような女性が来て、その人と結婚した」

4.2.7. tap, tapta, taptap 「~こそ」

平叙文中に用いられ、強調したい焦点を示したり(39)、文全体を強調したりする(40)。用例はあわせて50ほどみられる。3つの意味の違いはみいだされない。副助詞のtapと副詞のtap「このように」とは意味が違い、別な語とする。

REFSING (1986)は副助詞のtapを文末形式の構成要素としてのみ取り上げている。田村(1961:27)がtapを「つよめの(副)助詞」としているのは本稿の記述に近いと考えられる。

- (39) a=kor sapo enon oman wa tap hosipi wa ek konno
 私が~を持つ 姉さん どこへか 行く してこそ 帰る して 来る すると
 poro sike ki
 大きい 荷運び ~をする
 「私の姉さんはどこへか行ってこそ、帰ってくると大きな荷物を持ってきた」
- (40) rewsian hine arki=an ruwe tapta an na
 私が泊まる して 私が来る ようすこそ ある ぞ
 「私は泊まってきたのでこそある」

5. 終助詞についての先行研究

5.1. 知里(1942, pp.567ff.)は「第二種の助詞(終助詞)」として次のように述べている。なお

知里 (1953, pp.921-923) は同様の観点から分類した助詞を「第2種」としている。

第二種の助詞は、(イ)用詞に付く。(ロ)「用詞+第1種の助詞(奥田注:助動詞など)」から成る連語に付く。(ハ)文を必ずそこで終止する。この(ハ)の条件の存否が第二種と第三種とを分つ根拠となるのである。

この種の助詞はこれを取り去つても文意に実質的な変化はない。すべて感動的な意を添へるものばかりである。従つて独立的用法をもつものは無い。

田村 (1960, p.346) は終助詞を

形式+□=動詞的形式ではない抽象的完結文

の□の位置にはいることのできるもの

と定義した。そして知里 (1942, 1953) が終助詞を動詞的形式に後続するものに限り、名詞的形式にも後続するheとunを間投助詞に分類したのに対し、田村 (1961: 34) は上のような終助詞の定義に基づきunを終助詞に分類している。なお「抽象的完結文」とは田村 (1960, p.345) によれば「完結文」から文音調を取り除いたもの」である。

REFSING (1986, pp.228ff.) は本稿で扱う終助詞をsentence final forms (「文末形式」) の項で記述し、次のように述べている。

There are only four "genuine" sentence final suffixes in the Shizunai dialect - namely the imperative yan, the assertive/necessative/hortative na, the interrogative/dubitative ya, and the affective wa. All four are modal in content; they follow full sentences to which nothing more may be added, and modify the meaning of these sentences according to the speaker's attitude.

仮訳: 静内方言には「純粋な」文末の接尾辞は4つしかない。すなわち、命令のyan、断定・必要・忠告のna、疑問・疑念のya、感情のwaである。これら4つはすべて様態の意味を持ち、これ以上何も付け加えられることのない完結文に後続して、文の意味を話者の態度に従って修正する。

しかしREFSING (1986, p.228-229) は次のようにも述べ、「純粋な文末の接尾辞」のほかにruwe neなどの名詞化辞とコピュラなどによって文が終止する表現も文末形式のなかに含めている。

Ya and na (and to some extent wa) actually only rarely follow directly upon the main predicate of the sentence which they modify; they are frequently preceded by a nominalization (consisting of a nominalizer followed by the copula or a verb expressing location or existence). In some case the sentence final suffixes is even dropped, so that the nominalization alone functions as sentence final. In these cases, however, there are examples of the whole sentence being further exposed to conjunctionalization ..., or nominalization ..., thus eliminating the sentence final function and retaining only the modal content.

仮訳: yaとnaは、そしてwaもある程度までは、それらが修正する文の主要な述語に直接後続することは実際にはまれである。それらはしばしば名詞化(コピュラまたは場所・存在の動詞に後続された名詞化辞からなる)に後続する。場合によっては文末の接尾辞が脱落することもあり、その結果名詞化だけで文末として機能する。これらの場合には、しかしながら、文全体がさらに複文となったり、名詞化したりして、文末としての機能が失われて様態の意味だけが残る。

5.2. 拙稿(1995)で述べたとおり、一部の終助詞とくに「その事柄について相手の注意をよびおこし、その結果、何らかの行動を相手が行うことを要求する」(田村、1988, p.61) na「～ぞ」

は、品詞分類をめぐって接続助詞とのあいだで従来問題とされてきた。田村(1973a:35)は「naは終助詞と接続助詞の両方にまたがる存在」としている。REFSING(1986)もnaを文末形式の項(p.234)と接続助詞の項(p.253)の両方で取り上げている。そして接続助詞の項で、命令や要求を表す文が後続するときは接続助詞として、後続する命令が明示されないときには終助詞として働くとの説明がある。

6. 終助詞の統語論的特徴

6.1. 終助詞の定義は、田村(1960, 1961)に準じて、文に後続して動詞句ではない文を作る付属語とする。主に話し手の聞き手に対する態度を付加したり強調したりする働きを持つ。終助詞が後続しうるのは原則として動詞句に終わる文だが、7.1.に示すとおり終助詞のaniは終助詞のyanのあとにさらに続くことができる。

また7.6.で述べるとおり終助詞のyanのあとにはさらに接続助詞のwaが続くことがあり、7.5.で述べるとおり同じくyaのあとに、場合によっては副助詞のkaを介在させながら、ある種の動詞が続くことがある。ただしこれらはいずれも、yanに先行する命令文の、あるいはyaに後続する動詞の本来持っている特徴によるものであり、これらの終助詞に文を続ける働きがあるのではない。

田村(1961:34-35)が名詞句に後続するとした終助詞のうち、unはこの方言にはみられず、anは副詞によって修飾されることがある(上掲例文(28))ので動詞とみるべきであり、tapanは副助詞のtapとanに分析することができる。

REFSING(1986)が文末形式のなかに含めた名詞化辞などからなる一群の形式は、本稿では終助詞に含めない。それらの詳細な分析は別稿に譲る。

6.2. 拙稿(1995)で述べたとおり、終助詞と接続助詞との区別は、副助詞が後続することができるか、および名詞を修飾する節のなかの従属節などを作ることができるか、という2つの基準から明確に行うことができる。この基準に従って、本稿ではnaを終助詞として扱う。

またREFSING(1986)が文末形式の記述のなかで終助詞のyaとして分析したaは、本稿では助動詞のa「～した」だと分析する。

7. 個々の終助詞の記述

7.1. ani「～なさい」

命令文に後続して、命令の念を押す。10強の用例がみられる。動詞に終わる命令文に続く(41)だけではなく、末尾に終助詞のyanが置かれた命令文にも後続する(42)。なお例文(42)は織田さんが目上として意識していた町職員に向けられた言葉であり、この方言のaniは同輩や目下に対してのみ使われるわけではない。

REFSING (1986) には記述がない。田村 (1961: 33) は沙流方言の終助詞 *hani* について相手を限定せず「相手に何らかの行動を要求していることについて、念をおす」とした。いっぽう田村 (1996, p.170) は「同輩や目下、子どもや弱い人に対して親愛感やいつくしみやいたわりを込めて話す中で使われる。」と述べている。

- (41) a=kor oper e=hawe itekke sanke ani
 私が～を持つ 女の子 あなたの声 禁止 ～を出す なさい
 「私のお嬢さん、声を出してはいけません」
- (42) itekke ioyra no owpeka no ye yan ani
 禁止 物忘れする して 正しい して ～を言う ませ なさい
 「物忘れせずに正しく言いなさいませ」

7.2. na 「～ぞ」

ア. 理由を表す文に後続して、聞き手に行動を促す。しばしば直後に行動を求める命令文が後続するが、6.2. で述べたとおり、本稿では接続助詞ではなく終助詞として扱う。イ. とくに口頭文芸のなかで、口調を整えるために意味を持たず用いられる。用例は併せて1300以上ある。

REFSING (1986, p.234) は *na* に接続助詞と終助詞の両方の働きを認めているが、終助詞としての *na* の記述は本稿のものと矛盾しないと考えられる。

- (43) a=kor nispa sukeokere=an na hetak hopuni wa ipe
 私たちが～を持つ 紳士 私たちが炊事を終える ぞ さあ 起きる して 食事をする
 「ご主人様、私たちは炊事を終えたんですぞ。さあ起きて食事しなさい」
- (44) an=mi hayokpe an=ama ki na
 私が～を着る 鎧 私が～を脱ぐ ～をする ぞ
 kamuy pon kasa a=uyna hine an=mi hayokpe sikehe
 神 小さい 笠 私が～を取る して 私が～を着る 鎧 ～の荷物
 an=kar na
 私が～を作る ぞ
 「着ていた鎧を私は脱いだぞ。
 神作りの小さい笠を取って、着ていた鎧の荷物を私は作ったぞ」

7.3. ne 「～ぞ」

6.2.1. で示した *esta* とともに用いられ、文末を結ぶ (上掲例文(11))。用例は6例存在する。

REFSING (1986) は文末形式の要素としてのみ示している。田村 (1961: 31) が報告した沙流方言の *nek* に対応する可能性がある。

7.4. wa 「～よ」

平叙文に後続して、口調をやわらげる。本稿の資料中には5例ほどしか存在しないが、日常会話を中心とする資料にはよりひんばんに現れると考えられる。

REFSING (1986, p.237) の記述は本稿の記述と矛盾しない。

- (45) itomnukar=an yakun a=aktonoke a=kor turesi nekon iki wa
 私が結婚する したら 私の弟君 私が～を持つ 妹 どのように 行動する して
 ipe ki ya, somo an kunpe ne wa
 食事する ～をする か 否定 ある はずのこと ～である よ
 「私が結婚したら私の弟君と妹とはどうやって食べて行くでしょうか。
 (結婚は) できないことですよ」(結婚の申し込みに対する返事のせりふ)

7.5. ya 「～か」

疑問・疑念の文に後続して疑問・疑念を強調する(46)。用例は200弱得られている。文にyaが後続し多くは副助詞のkaがさらに後続したかたちで、erampetek「～をわからない」などの動詞の目的語となることも多い(47)。しかしこれらの動詞はya(ka)が後続していない「裸」の文をそのまま目的語に取ることもできる(48)ので、yaが文を名詞化して動詞の目的語になれるようにしていると解釈する必要はない。

REFSING (1986, p.229) は”It may indicate a direct question, or simply doubt about the statement made”(「直接の疑問あるいは述べられたことについての単なる疑念を表示することができる)としている。しかしyaが後続しなくても疑問文にはなりうるので、知里(1942, p.569)の指摘どおり、ya自体には疑問文を作る働きはない。

- (46) enon terke enon cirir ya
 どこへ 飛ぶ どこへ 逃げる か
 「(敵は) どこへ飛び、どこへ逃げたのか」
- (47) enon sikirpa=an yak pirka ya ka a=erampewtek
 どこへ 私が向かう したら よい か
 「どこへ向かったらよいかも私はわからなかった」
- (48) nekon iki=an a=koyaynuturaynu
 どのように 私が行動する 私が～について我を忘れる
 「私はどう行動しているのかわからなくなった」

7.6. yan 「～ませ」

命令文に後続して、命令の対象が複数であることを明示する(49)か、命令を丁寧にする(50)。直前の動詞が複数形を持つ1項動詞の場合は複数形につく。用例は400以上みられる。拙稿(1995:

145)で述べたとおり、2つの命令文が接続助詞のwaで結びつけられる場合に限り、yanの後にさらにwaが続くことができる(51)。

REFSING (1986, pp.202-203, p.229) の記述は本稿の記述と矛盾しない。

- (49) a=korsi utar itekke iruska yan
私の子供たち 禁止 怒る ませ
「私の子供たちよ、怒ってはいけません」
- (50) kamuy rametok inkar yan
神 勇者 見る ませ
「神の勇者よ、ご覧なさいませ」
- (51) tekturiri yan wa poronno ipe yan
手を伸ばす ませ して たくさん 食事する ませ
「手を伸ばしてたくさん食べなさい」

7.7. ro

勧誘の文に後続して、勧誘の意味を明示する。録音された資料中には現れないが織田さんと筆者との会話のなかには現れていた。7.5.のyaなどと同じように、roが後続しなくても勧誘の文は作りうる(52)ので、ro自体には勧誘の文を作る働きはない。

REFSING (1986) には記述がない。

- (52) "a=kor nispa hetak hotke=an" ari wenkamuy ... an=teke ani
私が～を持つ 紳士 さあ 私たちが床につくと 悪者 私の手 ～を持つ
「『私の旦那様、さあ床につきましょう』と悪者は…私の手を取った」
(悪い女の夫にさせられそうになった若者の自叙)

参考文献

- REFSING, Kirsten (1986): *The Ainu Language*, Aarhus University Press.
- 浅井 亨 (1969): 「アイヌ語の文法 —アイヌ語石狩方言文法の概略—」、アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』、第一法規出版、pp.771-800.
- 奥田 統己 (1995): 「アイヌ語静内方言の接続助詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 1: 139-159.
- 静内町教育委員会 (編) (1991): 『静内地方の伝承 (I) —織田ステノの口承文芸 (1) —』、
————— (1992): 『静内地方の伝承 (II) —織田ステノの口承文芸 (2) —』、
————— (1993): 『静内地方の伝承 (III) —織田ステノの口承文芸 (3) —』、
————— (1994): 『静内地方の伝承 (IV) —織田ステノの口承文芸 (4) —』、
————— (1995): 『静内地方の伝承 (V) —織田ステノの口承文芸 (5) —』、
- 田村 (福田) すず子 (1960): 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」、

- 『民族学研究』24/4：67-78.
- (1961)：「アイヌ語沙流方言の副助詞と終助詞—アイヌ語の助詞についての報告その2—」、
『言語研究』39：21-38.
- 田村すず子(1973)：「アイヌ語沙流方言におけるcikiの用法」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』11：28
-45.
- (1996)：『アイヌ語沙流方言辞典』、草風館.
- 知里真志保(1942)：『アイヌ語法研究 —樺太方言を中心として—』、『樺太庁博物館報告』4/4 (参照ペ
ージ数は『知里真志保著作集 3』所収のものによる).
- (1953)：「アイヌ語の助詞」、金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)『金田一京助博士古稀記
念言語民俗論叢』三省堂、pp.913-932.

Adverbial Particles and Sentence Final Particles in the Shizunai Dialect of Ainu

OKUDA Osami

Summary

This is another attempt to describe the Shizunai dialect of Ainu, following on from the author's previous article "Conjunctionalizers in the Shizunai dialect of Ainu" (1995).

While REFSING (1986) has already presented a comprehensive description of the same dialect that includes adverbial and sentence final particles, the present author feels that there is room to modify and supplement this work based on the results of his own research. The author also surveys the major descriptions of these particles that have been previously published and contrasts the adverbial and sentence final particles of the Shizunai dialect with those of other dialects.

The present research is largely based on an analysis of folklore texts narrated by Ms. Orita, an Ainu lady who lived in Shizunai district from 1901 to 1993. Amounting to 110,000 tokens, these were recorded on tapes by the Shizunai Board of Education and transcribed and translated into Japanese by the present author. The greater part of these texts have already been published by the Board (1991-1995).

According to the author's definition, adverbial particles are bound forms which follow noun phrases, adverbial phrases, or verb phrases to modify their semantic role without changing their syntactic role in a sentence. Sentence final particles are bound forms which, when placed after verbal sentences, form non-verbal sentences and emphasize the speaker's attitude towards the addressee.

The author also points out that the adverbial particles of this dialect can be divided into two functionally different sub-groups - those adverbial particles that appear rather freely in the sentences and affect only their direct antecedents; and those that appear only in main clauses and function as focus-markers of the modality of the whole sentences.

Key Words : Ainu language, adverbial particles, sentence final particles, modality, focus